

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1.				
(学術論文(欧文)) 1.				
(学術論文(和文)) 1. 「トマス・モアの『リチャード三世史』」 2. 「ヒューマニスト歴史叙述としての『リチャード三世史』」 3. 「マキャヴェッリアン・モーメント再考」	単 単 共	1987年 1988年 1989年	『欧米文化研究』2号 『史境』17号、32-47頁 『欧米文化研究』4号、52-67頁	『三世史』を通じて展開されているもモアの政治思想の考察をこころみた。君主のあり方を論じる『君主の鑑』文学の伝統を継ぎ、勇気・賢明・慈悲・節度等の理想君主の徳目とその反対の僭主の悪徳が、エドワード四世やリチャード三世を初めとする為政者や政治上の出来事との分析と密接に結びついていることを論じた。 『三世史』にみられる歴史叙述上の特徴として、教育的意図の優先、現実政治＝舞台・為政者＝役者とみる政治認識、結婚等のあり方などの一般的な社会道徳への言及を明らかにした。また特に、臨場感のある演劇的文章スタイルや古典古代の修辞学理論に従った弁論構成、風刺・ユーモアの多用など、人文主義者特有の叙述スタイルを論じた。 太平洋圏における共和主義思想の展開を独自のパラダイム「マキャヴェッリアン・モーメント」で論じたJ.G.A. ポコックの研究を踏まえ、17世紀英国革命期、共和政的市民意識が、思想家ハリントンの著作『オシアナ』にどう反映しているのかを検討した。前半はポコックの視点と革命期思想の関連、後半は『オシアナ』の共和政体的特質を論じた。

4. 「エラスムスと政治的現実—『キリスト教君主の教育』の君主と臣民の関係に関する記述から」	単	1991年	『社会文化史学』28号、56-64頁	エラスムスの君主鑑『キリスト教君主の教育』を題材に、倫理道徳視点から政治のあり方を説いた人文主義者の思想が、対極とされているマキャヴェッリの政治現実をどう論じているかを検討した。特に君主と臣民とのあり方を論じている部分に注目し、法や行動を通じて臣民を教化・操縦する必要性への言及の持つ意味を論じた。
5. 「モアとベーコンの政治観」	単	1993年	『イギリス哲学研究』16号、29-41頁	モア『三世史』の約百年後、同様に英国大法官であったフランシス・ベーコンは、ほぼ同時代を扱った歴史叙述『ヘンリ7世治世史』を著した。この二作品に著された脱倫理的な政治規範を比較し、こうした規範を認めつつ巧妙に沈黙したモアと、これに基づく賢知を評価して叙述を行なうベーコンとの差異を詳解し、そこに16世紀百年間の政治の変遷をみてとれることを論じた。
6. リチャード・ペイスのDe fructuの人文思想史上の意義	単	2008年3月	『社会文化史学』50号、2-18頁。	15世紀の人文主義者にして宮廷外交官であったリチャード・ペイスの教育書『学問から得られる成果について』の学問教育思想の特質を論じた。自由七科や神学・専門三科の枠組に従いつつ、擬人化された諸学科が次々登場し、称賛と批難の論述・対話・演説を重ねる劇的な多様な表現手法で、人文思想教育の意義と成果を説いていることを明らかにした。構成・内容面上の不統一や未完成な部分があるが、人文思想教育論完成への「途上の作品」として、その意図や独自性は評価できると論じた。
7. (研究ノート) セント・ポール校再建期におけるイングランド人文主義	単	2012年3月	『史境』64号、105-118頁。	16世紀初頭のイングランドで活動していた3人の人文主義者ジョン・コレット、エラスムス、リチャード・ペイスが、中等教育校セント・ポール校再建を契機に、その教育思想を述べた「学校規則」『学習計画』『成果』を考察した。徳・信仰と学識の学識の調和を共通して説きながらも、学問と信仰のバランス、どの学科や分野を重んじるかでは三者に相違があったことを論じた。
(紀要論文) 1. 「歴史叙述とレトリック」	単	1993年	『人間科学』10巻2号、131-139頁	古典古代作家と人文主義作家、双方における歴史叙述とレトリックの関係を、理論的言及を中心に考察した。古典期に人間教養の徳とされ弁論技法として確立したレトリック、その教育目的と文章技法の影響下で誕生した歴史叙述、前者は14世紀イタリアで人文主義者の下で再興し、やや遅れて後者もその意義を再認識されるようになったと論じた。

2. 「"the book of fortune"の序文詩におけるトマス・モアの運命観」	単	1994年	『人間科学』11巻、2号、131-139頁	モアの初期の作品、占本the booke of fortune"の「序文詩」を題材に、西洋史における運命観の変遷の中で、気まぐれで不規則な古典運命女神伝統に強く影響されつつ、キリスト教倫理に基づいて、悪質な運命像とこれに対する厭世的処世訓を説いていることを論じた。著者による「序文詩」全訳も掲載している。
3. 「延臣論としての『リチャード三世史』」	単	1995年	『人間科学』12巻2号、105-118頁	これまでの『三世史』研究が、君主鑑の視点を中心であることを反省し、君主を囲む廷臣に関する記述を詳解して、モアの政治思想の考察をこころみた。廷臣の野心や彼らの間の不和、他方で忠誠心や悪事を見抜く知恵の欠如などが僭主を幫助する要因とされており、そこに伝統色の強い道徳的廷臣論が明らかになっていると論じた。ただし、理想的廷臣モートン卿の記述に非伝統的な含みがあることも指摘した。
4. 「フランシス・ベーコンの歴史叙述—その理論と応用」	単	1996年	『人間科学』13巻2号、63-75頁	前半では、フランシス・ベーコンの歴史叙述理論を『学問の発達』を中心に考察し、救済史観を脱して、人間の精神・感情と出来事があるがままを記すことを説くが、教育的視点やレトリカルな叙述面も彼が重視していたことを示した。後半は、彼の歴史叙述『ヘンリ七世治世史』が、その理論の応用においてほぼ成功していることを論じた。
5. 「『ピコ伝』におけるトマス・モアの思想」	単	1997年	『人間科学』14巻2号、63-86頁	モアが友人の一修道女に寄贈した、イタリア人文主義者ピコ・デラ・ミランドラの伝記と詩の抜粋翻訳を素材に彼の思想を考察した。翻訳内容を検討する限りは、進路に迷ったモアが、人文学の学識とキリスト教信仰を両立させたピコに解決を求めたとする説に説得力がある。だが、彼や仲間の人文主義者の言説を考慮した場合、修道女への寄贈の形を取った信仰の教訓書とみるほうがより適切だと結論した。
6. 「15世紀末から16世紀初頭のイングランドにおける聖域特権とトマス・モア」	単	1999年	『人間科学』16巻2号、31-47頁	教会聖域特権は、国家権力成立と密に関係する法政治史上の大問題で、モアの生きたテューダー初期イングランドもそうした重要な時期であった。前半では、聖域特権の弊害が注目され、それが徐々に後退していた状況を判例から跡づけた。後半では、『三世史』でモアが展開している聖域論争を詳解し、彼が論争をよく整理していること、その上で、王権側からの強硬な聖域制限に抵抗すべく、穏健な聖域抑制論を展開していると論じた。

7. 「『ドルプ宛書簡』におけるトマス・モアの人文主義」	単	2002年	『人間科学』19巻2号、101-116頁	エラスムス『愚神礼賛』を批判したドルプに反論したモアの書簡を素材に、興隆しはじめた北方人文主義をめぐる論争点を考察した。エラスムス・ドルプ間の論争整理を踏まえて、中世論理学の瑣末な規則批判と古典論理学の再評価・文法学への強力な支持と弁論術への控えめな支持・キリスト教原典志向・聖書や諸文献の翻訳や校訂の推進・古典語学習の推奨・「共通感覚(sensus communis)」重視等の論争点を明らかにした。
8. 「トマス・モア『リヤード三世史』におけるショア夫人の役割」	単著	2004年3月	人間科学 11-22頁	エドワード四世の妾ショア夫人は、英文学の伝統的題材として女性像研究でも肯定的存在として取り上げられている。ところで、彼女の伝承発端はモアの創造であり、彼は従来の研究が述べているような、同情・哀れみを誘い、肯定的価値を体現した女性としてだけでなく、未熟で節度を欠いた女性としても描いている。女性論とは別の教訓的意図が複雑にからんでいることを無視して、女性像として論じること慎重であるべきと結論した。
9. テューダー朝初期人文主義をめぐる非難と弁明 トマス・モアの弁明・反論の場合	単著	2006年3月	人間科学、33-44頁	エラスムス『校訂新約聖書』の出版を契機とする論争の中で人文主義を擁護したモアの三つの書簡、オックスフォード大宛・リー宛・バットマンソン宛を題材に、人文主義の是非をめぐる言説を考察した。人文研究の価値と普及・古典語研究の意義・原典志向のキリスト教研究と中世スコラ学への反発・キリスト教原典の翻訳・校訂の諸相だけでなく、論争当事者間の党派パトロネジも含んだ対立の構図を明らかにした。
10. (事例研究) 初年次教育における日本語科目の展望ー人間科学部「学びと探究の方法」の場合ー	単著	2011年3月	『人間科学』28巻2号、95-103頁	人間科学部1年次必修科目「学びと探究の方法」での、基礎的日本語養成の実践内容と結果(学生成績と学生評価)を取りあげた。基礎的内容であるものの、授業内容の改善に伴い、学生がこの授業の意義を評価しつつあることを示した。また、この種の授業が学生の動機づけやアセスメントにも効果があると主張した。
11. 西洋人文思想の系譜からみた「人間科学」ーヴィーコ思想を契機としてー	単著	2011年3月	『人間科学論究』19号、81-90頁。	18世紀のイタリア思想家ジャンバッティスタ・ヴィーコ思想、特に徳と修辞学を中心とした人文思想を論じた。蓋然性、日常感覚、賢慮、修辞学的手法などを重視するその人間観・学問観が、自然科学的手法とは別の、人文思想の系譜を継ぐ「人間科学」の探究にとって重要であると主張した。

<p>12 トマス・モア『ユートピア』をめぐる人文主義書簡の研究—ポライトネス理論の応用による—</p>	<p>単著</p>	<p>2017年9月</p>	<p>『人間科学』35巻1号、55—64頁。</p>	<p>『ユートピア』めぐる人文主義者たちの書簡のやり取りをポライトネス理論の観点から検討し、共通基盤の形成・確認が、ポジティブ・ポライトネスとして捉えられることを主張した。また、お詫び、依頼、反論提示、パトロン・権勢者への賛辞等の多様な言説を、ネガティブ・ポライトネスの観点で検討した。</p>
<p>13 「西洋修辞学伝統におけるエラスムス『書簡作成術』」</p>	<p>単著</p>	<p>2019年9月</p>	<p>『人間科学』37巻1号、117-128頁。</p>	<p>エラスムス『書簡作成術』を検証して、書簡理念とその体形分類、豊富な規範例などの点では古典文化以来の西欧修辞学伝統を踏襲している一方、「混合書簡」の詳論や受け手と送り手の心理関係に注目した詳解な書簡分類などの独自性を考察した。</p>
<p>(辞書・翻訳書等) 1. 事典</p>	<p>共著</p>	<p>2007年11月</p>	<p>研究社日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』515-517頁</p>	<p>ユートピア思想の歴史の変遷を、イギリス思想を核に、簡潔な定義から、広義化するユートピア、モア以前のユートピア、モアやペイコン、革命期のユートピア、18・19世紀のユートピア社会主義、ディストピア思想、そして現代のユートピアまでを論じた。</p>
<p>(報告書・会報等) 1. 「『リチャード三世』と神の摂理」 2. 「フランス大革命 マチエ」「第二次世界大戦 チャーチル」廣川洋一編著『古典・名著の読み方』 3. 「『人間科学』への二つの私見」 4. 書評：『英国をみる』</p>	<p>単 単 単 単</p>	<p>1989年 1991年 1995年 1992年</p>	<p>『ルネッサンス ニュース』第9号 日本実業出版社 『人間科学のすすめ』常磐大学・人間科学部 『史境』第25号、93-100頁</p>	<p>モアが出来事の因果を倫理道德と常に結び付けていなかったことに対し、シェイクスピアは歴史の背後にある神の働きを常に想定しつつ歴史を捉えていたことを明らかにした。 古典名著を一般読者向けに、ポイント、要約、著者にわけて簡潔に解説する。アルベール・マチエ『フランス大革命』とウィンストン・チャーチル『第二次世界大戦』 人間諸科学の統合としての「人間科学」と、「人間になるため」の「人間科学」という二つの視点を提示した。 草光俊雄他『英国をみる』（リポート、1991年）の書評。イギリス近現代史研究者13名による諸論文を、(1)歴史研究史や研究論(2)産業・労働問題論(3)病理・衛生問題論に独自に再分類して評論した。「日本を考えるための」「英国をみる」視点の必要性和史料面でのリアリズムの難しさを指摘した。</p>

5. 書評：『ジェントルマンであること その変容とイギリス近代』	単	2001年	『史境』第43号、104-110頁	山本正編『ジェントルマンであること その変容とイギリス近代』（刀水書房、2000年）。イギリス近現代研究者10名による論文集を解説、帝国周縁からの視点を評価し、19世紀初頭のジェントルマンシップ概念変化の更なる検証を希望した。
(国際学会発表) 1. The History of King Richard III as speculum consiliariorum	単	1995年	The Fifth International Thomas More Symposium (Mainz, Germany)	My paper explains why More's book, the History of Richard the Third can be construed as a speculum consiliariorum. He knew well that the King's government had been often led astray by bad councilors and evil courtiers.
(国内学会発表) 1. 「歴史叙述と政治思想 トマス・モアとシェイクスピアの場合」	単	1988年	第38回日本西洋史学会	モアの歴史叙述『三世史』と、これと同様の素材を扱ったシェイクスピアの一連の歴史劇の政治思想を比較検証した。モアが君主を囲む政治メカニズムを考察していた一方、シェイクスピアは伝統的政治を破壊する僭主個人の力を深く分析していたことを論じた。
2. 「『リチャード三世史』における神・運命・人」	単	1988年	歴史人類学会第9回総会	『三世史』におけるモアの歴史観の表明を、運命の不確実性の視点、傲慢などの人間的要因の視点、神の摂理の視点の三点から考察した。モアが、教育的意図を持ちながらも、三視点が絡みあう複雑な歴史認識を描いていることを論じた。
3. 「『リチャード三世』と神の摂理」	単	1989年	第9回ルネッサンス研究所総会	シンポジウム「モアとシェイクスピア」での発表。同じリチャード三世を素材にした歴史作品を著したモア（歴史叙述）とシェイクスピア（劇）の歴史観を比較した。シェイクスピアは歴史の背後にある神の働きを常に想定しつつ歴史を捉えていたことを論じた。
4. 「ヒューマニストの政治思想における君主と民—エラスムス『キリスト教君主の教育』の場合—	単	1990年	第26回社会文化史学会大会	エラスムスの君主鑑『キリスト教君主の教育』の君主と臣民とのあり方を論じている部分に注目し、エラスムスがマキャヴェッリの政治的現実をどう論じているかを検討した。
5. 「モアとバイコンの政治観」	単	1991年	第15回日本イギリス哲学会研究大会	モア『リチャード三世史』とバイコン『ヘンリ七世治世史』二つのヒューマニスト歴史叙述を、政治経歴、執筆意図、君主像や君主の徳目などの視点から全般的に比較した。

6. 「The book of Fortune におけるトマス・モアの運命観」	単	1993年	第24回日本トマス・モア教会総会	モアのthe booke of fortune”の「序文詩」が古典運命女神伝統に影響を受けつつ、キリスト教倫理に基づいて、悪質な運命像と対峙する厭世的処世訓を説いていることを考察した。
7. 「廷臣論としての『リチャード三世史』」	単	1994年	第25回日本トマス・モア教会総会	『三世史』の廷臣に関する記述に基づき、彼らの野心や不和、忠誠心や知恵の欠如などが政権崩壊要因であることを説いた反面的廷臣論であると結論した。
8. 「教会聖域特権とトマス・モア」	単	1996年	第29回日本トマス・モア協会総会	教会特権が世俗政権を前に徐々に後退していたテューダー初期イングランドの状況を背景に、強硬な王権側からの聖域制限に抵抗したモアの思想を論じた。
9. 「『ドルブ宛書簡』におけるトマス・モアの人文主義」	単	2001年	第32回日本トマス・モア協会総会	人文主義批判を展開したドルブに反論したモアの書簡を素材に、古典学の支持、キリスト教原点志向などの人文主義側の論争点を明らかにした。
10. 「『リチャード三世史』におけるショアの役割」	単	2003年9月	第23回ルネッサンス研究所総会	英文学の伝統の中で登場する「ショア夫人」に関する評価・イメージの不確かな部分を、ほぼ初出の史料である『リチャード三世史』に基づいて、再検証を行った。
11. 人文主義をめぐる非難と弁明の構図 — テューダー朝初期人文主義の場合(人文主義非難へのモアの弁明・反論)	単	2005年7月	第41回社会文化史学会大会	1510年代モアが、人文主義を批判する一連の聖職者・知識人に対し、人文主義を擁護して記した一連の三書簡を基に、当時の人文主義の是非をめぐる言説を主に考察し、彼の人文思想の特質を論じた。
12. リチャード・ペイスのDe fructu その人文思想史的意義	単	2007年9月	第23回ルネッサンス研究所総会	15世紀の人文主義者にして宮廷外交官であったリチャード・ペイスの教育書『学問から得られる成果について』の学問教育思想の特質を論じた。
13. セント・ポール校再建期におけるイングランド人文思想	単	2010年10月	歴史人類学会第31回総会	16世紀初頭の中等教育校セント・ポール校再建期をめぐる「学校規則」『学習計画』『成果』を考察し、イングランド人文思想の学問論や学問と信仰の関係に関する特質を論じた。
14. 大規模クラス・一斉授業での初年次日本語科目 — 取り組みと評価 —	単	2013年3月	日本リメディアル教育学会 関東甲信支部大会	担当する初年次科目「学びと探究の方法」の実践と学生授業評価の結果を報告した。評価に基づく授業の改善や、能力別によるクラス分け(クラスの少人数化)が、評価の向上につながったことを示した。

15. 人文主義歴史叙述フランシス・ベイコン『ヘンリ7世治世史』の描く君主の統治	単	2014年3月	第1回社会史研究会	フランシス・ベイコンが著した『ヘンリ7世治世史』は彼の政治経験の集大成である。、為政者の知恵、家臣団・党派と為政者の関係、国家理性、外交政策、民衆対策、法正義などの面でどのような特徴があるのかを検証した。		
16. 「中等教育の教材を大学生に活かす」ラウンドテーブル『日本語教育における高大連携の可能性』	単	2016年8月	日本リメディアル教育学会第12回全国大会	リメディアル教育・初年次教育における日本語基礎学力は、高校の「国語表現」「社会と情報」「家庭総合」の教育課程の中ですでに取りあげられていることを詳解し、この繋がりを効果的に広報・活用することが高大接続の可能性を広げると提唱した。		
17. コミュニケーション理論の応用による人文主義書簡研究の理論と方法 一トマス・モアをめぐる諸書簡研究を対象に	単	2016年9月	第52回社会文化史学会大会	ルネサンス期人文主義者の書簡を素材にした思想研究にあたり、「ポライトネス理論」の観点がどこまで応用できるのが、『ユートピア』めぐる諸書簡を素材に検討した。依頼やお詫び、パトロネージ維持といった関係性を考察する枠組として応用可能性があると指摘した。		
18. 西洋修辞学の伝統と書簡術 エラスムス『書簡作成術』の場合		2019年3月	第6回社会史研究会	エラスムスの著した『書簡作成術』が、西洋古典以来の伝統的な書簡作成術を継承しながらも、構成の柔軟さや、書き手の心理を配慮した書簡分類など、より細かい人間関係を踏まえていることを説いた。		
(演奏会・展覧会等) 1.						
(招待講演・基調講演) 1.						
(受賞(学術賞等)) 1.						
研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 初期テューダー期のオックスフォード・リフォーマーを中心とした人文主義の研究	代表	奨励研究 (A)	1999～2000年度		1,900千円	トマス・モアを中心として初期テューダー期の人文主義者群の「価値観の共通な枠組み」の検証を目標とし、各人文主義者たちの考察研究につなげた。

2. 知の技法としての人文主義的書簡と近代教養市民の自己形成	代表	基盤研究 (C)	2019～ 2022年度		3,400千円	人文主義者の交わした書簡や書簡集・書簡作成術等の著作物の検証に基づき、彼らが生成した知的諸観念を明らかにし、この後に登場する近代教養市民の自己形成との繋がりを考察する。コロナ感染の影響で、2022年度まで延長した。
(競争的研究助成費獲得(科研費除く)) 1.						
(共同研究・受託研究受入れ) 1.						
(奨学・指定寄付金受入れ) 1.						
(学内課題研究(共同研究)) 1.		—		—		
(学内課題研究(各個研究)) 1. 15世紀後半から16世紀初頭にかけてのイングランド人文主義	—	—	1997年度	—		
(知的財産(特許・実用新案等)) 1.	—			—	—	